

令和7年度 結果の分析及び今後の改善策

(中間・最終)

広中央中学校区 校番4 学校名 呉市立広小学校

重点	d 中期(3年間) 経営目標	e 短期(今年度) 経営目標	l 結果の分析 (結果と課題をこう考えます)	m 今後の改善策 (こう改善します)
知	確かな学力を育成する。	基礎・基本の定着	<p>○学習規律という点で、ベルスタートができる児童の割合が前期では92%で後期では91%と少し数値が下がったが、教員側の意識が高まってきており成果が出てきている。</p> <p>○学期末テストの通過率40%未満の児童の割合は国語科では3%、算数科では7.4%と算数科が達成することができなかった。各クラスで学力の個人差が見られた。算数科においては、基礎的な知識・技能の未定着や問題文の理解の困難さに加え、算数に対する不安感や自己肯定感の低さが学習の妨げとなっていると実態が見られる。</p>	<p>○ベルスタートについては、教師の指示や注意で始めるのではなく、児童が「何をすればよいのか」と理解し、安心して学びに入れる環境と仕組みを整える必要がある。中学校で行っている「黙想」を取り入れる等、事前の準備や明確なルール作りなど全職員で取り組めるような工夫をしていく。</p> <p>○今後授業づくりを行う上で、児童のつまずきの要因を個別に把握した上で、基礎基本の徹底とユニバーサルデザイン化を取り入れた授業改善を行う。また、各クラス学級経営をしていく上で、安心して学べる学習環境を整えていくことも大切だと考える。また、朝のスキルタイムでは、簡単な四則計算を全校で取り組み確実な定着となるように、次年度に向けた取組を考え、実践していく。</p>
		思考力・判断力・表現力の育成	<p>○教職員研修等で、「ひろっ子学びのスタンダード」を再確認するとともに、各自が行っていることを共有する場を増やすことで、教職員が主体的に学ぶ授業づくりを行うことができた。また、「UD化」の視点で授業づくりを行い、実践内容を共有することでより個を大切に支援の工夫ができていていると考える。</p> <p>○標準学力調査の結果は、国語は、全国平均プラス1ポイント、算数は、プラス2.2ポイントであった。目標値である「平均プラス3」は国語は2ポイント、算数は0.8ポイント上回ることはできなかった。</p>	<p>○「ひろっ子学びのスタンダード」を意識した授業づくりを常に意識し、今後も各自が行っていることを共有する場をもつ。UDの視点ごとのグループごとに分かれ、授業の参観をし合う取組を行いながら、お互いに学び合うことを大切にしている。</p> <p>○分析結果を基に各学年の課題と改善策を考え、今後の授業づくりに生かしていく。また、研究授業や教職員研修を通し、UD化の授業づくりの本質を教職員全体で考え、次年度の研究に生かしていくようにする。</p>
徳	豊かな心を育成する。	規範意識の向上	<p>○朝、自分から相手に伝わる挨拶ができる児童の割合は、教職員71%、児童87%が肯定的に答えた。今年度の上半期に比べ、教職員・児童ともに評価は少し低くなり、目標の数値には届かなかった。生活目標等に設定されている期間を取り組んでいるが、その期間が終わると減ってしまう傾向がある。</p> <p>○いじめ防止に向けた取組として、早期発見解決と未然防止教育の取組を進めている。早期発見解決として、いじめアンケートを担当者と管理職、学年の先生が早く共有し、いじめの認知を進め、スピード感をもって対処していくようなシステムづくりを行うことができた。未然防止教育として、それぞれの委員会が「いじめ防止」をテーマに活動を考え、実施していく取組を行うことができた。</p>	<p>○生活委員会を中心に、挨拶運動の取組を児童主体で考え、段階的に継続して実施していく。挨拶や返事の声の大きさにも目を向け、次年度以降も取組を継続していく。</p> <p>○未然防止教育や早期発見解決の取組を継続して行う。特に、未然防止教育の視点を大切に、これまで実践した取組を次年度に引き継いでいく。また、気になる事案がある場合には、即座に対応できる体制を常に意識していく。</p>
		自尊感情・自己肯定感の向上	<p>○自分にはよいところがあると感じている児童の割合が、上半期83%から下半期93%に向上した。目標の数値を大きく達成することができた。以前のアンケートを改善し、児童が自分のよさを具体的に認知できるようにしたこと、成果が出たと考えられる。</p> <p>○1月末時点で、欠席数30日以上長期欠席者が24名、内「不登校」と認知した児童は17名(新規児童は7名)であった。継続している児童に対して個に応じた支援を続けるとともに、新規の児童を増やさない取組を進める必要がある。</p>	<p>○「ポジティブ行動支援」の理論を次年度も研修する。委員会活動を中心にして、児童が自己有用感を感じられる活動ができるようにする。</p> <p>○児童が自分のよさに気付くとともに、友達同士でよさを認められる取組を進めていく。</p> <p>○不登校(傾向)児童についての情報共有を全職員で行うことで、多くの教職員が児童に関わり、一人一人に応じた効果的な関わり方ができる機会を増やす。また、次年度の担任に引き継げるようにしていく。</p>
体	健やかな体を育成する。	健康の保持増進と体力・運動能力の向上	<p>○「いきいきチャレンジ週間」(早寝・早起き・朝ごはん・外遊び)の取組では、「朝ごはんを食べた児童」の割合は96%であった。朝ごはんについての授業を行った学年は意識が高まっていた。また、朝ごはんについての結果から、バランスのよい食事をとる児童の割合が少し増えた。しかし日を追うごとに、未回答の児童が増え、特に最終日に回答した児童が少なかった。保護者のコメントが入力されていないために送信ができていなかったと考える。</p> <p>○50m走・上体起こし・20mシャトルランの3種目を合計した伸び率は、目標値を0.2%下回った。種目別では、50m走の伸び率は2.2%、上体起こしの伸び率は8.9%、20mシャトルランの伸び率は3.2%だった。上体起こしの伸び率が高く、50m走の伸び率が低かった。1~3年生の3種目を合計した伸び率は5%を越えていた。4年生以上では、20mシャトルランの伸び率がマイナスになっていた。</p>	<p>○引き続き、生活リズムの重要性や簡単にバランスのよい朝食の例を示す等して啓発する。「いきいきチャレンジ週間」と保健の授業や委員会活動等と関連付けて実施する。また、担任による児童への働きかけを行う。児童が入力する回答シートとは別に保護者がコメントするシートを作成し、未回答を防ぐ。</p> <p>○体育科の授業で、場を工夫したり、児童のやる気を引き出す声かけをしたりして、運動することへの意欲を高め、運動量を増やす。また、「くれ・チャレンジマッチ・スタジアム」に計画的に取り組んだり、発達段階に応じた持久走、なわとび運動等に目標をもって取り組ませたりする等、運動に親しみながら、体力の向上を図る。また、体育委員会で運動に親しめるような取組を行っていく。</p>
		「自分の命は自分で守る」力の育成	<p>○災害時に避難する場所や避難の仕方について理解している児童は95.1%で、目標値を約5%下回った。全体として「自分の命は自分で守る」意識を高めることはできているが、残りの約5%の児童への対応が課題である。</p>	<p>○災害時に避難する場所や避難の仕方を自分で書き、土砂災害対応携帯マニュアルで確認する活動を、避難訓練等を利用して学期に1回は行う。引き続き、普段の授業で、可能な限り防災の視点を取り入れた授業を行う。</p>
業務改善	健康でやりがいのある職場をつくる。	児童と向き合う時間の確保	<p>○アンケートによる意識調査から、「児童と向き合う時間が確保されている」と感じている教職員の割合は、88%であった。上半期と結果は変わらずだが、休憩時間に児童と遊ぶ教職員や学級での過ごし方をそれぞれが考えて取り組んでいた。</p> <p>○ICTで授業準備や評価での活用、アンケート作成など、有効活用できていると感じている教職員の割合は88%であった。</p>	<p>○1日、1週間、月ごとのタイムスケジュールを事前に立てて見直しをもち、効率よく仕事をするために仕事の優先順位をつけたりしながら、職員全体で会議時刻や提出期限を守る意識を高めていく。</p> <p>○タブレットでの教材作成、キュビナのワークブック利用、教科書のQRコード活用を次年度以降にも使えるように資料箱等に残しておく。</p>
		長時間勤務の削減	<p>○10月から12月までの時間外勤務の平均が45時間以内の教員の割合は、82%であった。1か月の勤務時間の個人票を作成し配付することで、上半期より意識が高まった。しかし上半期同様、定時退校日(水曜日)や退校時刻を示しているが、日々の業務や生徒指導に係る時間が多いため課題である。</p>	<p>○教科担当を決めて、授業準備を学年で分担したり、先生同士が声をかけ合ったりしながら終了時刻を守るような雰囲気をつくっていく。</p> <p>○働き方改革への理解を一層深めるため、定期的に研修を行ったり、意義や目的について繰り返し伝えたりする。</p> <p>○今年度の資料の整理を行い、ロイポート、パソコン上で共有し役立てていく。</p>